

三心論の前述として

中野秀和

眞実の深い安心は道徳の内部では得られぬものであつて、我々の魂が救われると云ふ事は眞実の深い安心に達する事であり、これが宗教的救済の最も大切なものの一つである。今日の社会に於ても不安は單に漠然として、いや相違な確かさを以つて文明人の心を襲つて來てゐることは否定出来ない。この不安をどう取り扱い、いかにして安心の境地に達して行くかが、宗教者に与えられた業である。この安心について浄土教祖師の觀念により、私の所感を述べる事にする。

我が宗祖法然上人の撰撰集（法然上人全集五頁）に

所謂盛山慧遠法師慈愍三藏道綽台導等は也、中略、菩提流支三藏曇鸞法師道綽師

台導禪師懷愍法師少康法師

已上出唐
京師信二

とあるように、支那淨土教に盛山慧遠と慈愍三藏と道綽台導との三種の教至の別があり、菩提流支三藏、曇鸞法師、道綽禪師、台導禪師、懷愍法師、少康法師と次次相承した筆を書いてあり、そのうち最も關係の深いものとして曇鸞台導をあつてゐることが出来る。曇鸞は仏の名号を重んじ、觀念の説によつて五逆の罪を造る者も、十念を具足すればその罪が滅して往生を得るとして十念の極めて重要なることを認めた。又曇鸞は巧方便回向を、無量壽全の三輩に説いて

いる無上菩提は即ち願作仏心である。願作仏心は即ち度衆生心である。度衆生心は即ち衆生を攝取して有仏の淨土に生れしめようとする心であるとし、淨土往生を求めるものは、必ずこの無上菩提心を発さねばならぬとし、この心を発さず淨土を願つても往生は得られないと付け加えた。

この林に曇鸞が回向の要を力説し、又憶念の相續及び信心の淳一無難を尊び重きを信念に置かれた事は注目すべきであらう。台導の三心釈もこの小等に基礎づけられ夙られた所が多からうと思われらる。

觀聖の三心は曇鸞の注意に上らなかつたが、信心を重ね、又願生歸命を勧められた所を見ると、自ら三心の要を認められたという事が出来る。この三心を少しく考へて行くことにする。台導は、曇鸞の救後約五十年に生れ、道綽から淨土の法を受けて大いに他力本願を鼓吹し、又觀聖の三心

卷三種心即往生何等爲三一吾至誠心二者深心三者回向發願心具三心者必生彼國

を淨土衆の一組織に充當し、曇鸞、淨影等の試みられた信心を参照し、自己體驗に基く淨土教的信仰意識内容を一々その三心意義として擧げられた。台導は散古義の疏に、三心義趣を釈して安心領解の意味を季細に諸明せられている、この觀聖疏散古義（淨土二卷五五頁）に

絕料簡即爲三十一門、……（中略）……此三十一門義者約三對九品之文一就三一一品中一

皆有二此三十一即爲三一百番義一也

と云われ、散古九品は、すべて安心起行を具足した往生の行を明すものである。

特に、仏の本願力に由るが故に罪惡生死の凡夫も報身報土に入る事が出来るし、本願力を骨

力としてその教義を組織し、殊名念仏を本願の主体として、それに絶対独立の価値あることを明瞭にされたことは、指導発見の大なるものであらう。最もこの安心起行という善業は、天親教の中にも出てゐるか、通り一遍に通ず、少くとも教宗義上この名義の現れたのは、指導教を嚆矢とするのであつて、特にその淨土教的意義内容を盛らした点は全く師独自の壇場であらねばならない。

(研究室員・四回生)